うらわ美術館

ぐりとぐらとなかまたち
山脇百合子絵本原画展
記念

図書館員がよむ

美術家の絵本

ブックガイド

さいたま市図書館

図書館員がよむ

美術家の絵本

「ぐりとぐらとなかまたち　山脇百合子絵本原画展」
記念ブックガイド

今夏、うらわ美術館では「ぐりとぐらとなかまたち　山脇百合子絵本原画展」が開催されます。それにあわせてさいたま市図書館では、美術と絵本の親密なつながりをご紹介しようと、画家や彫刻家、写真家によってつくられた絵本のガイドを作成いたしました。このリストが、今回の展覧会をご覧になるうえでより広く深い鑑賞の手助けとなることを、そして、美術館にお越しの方は図書館へ、図書館にお越しの方は美術館へ、足をはこぶ一助となることを願ってやみません。

さいたま市図書館

目次

美術をあつかった絵本たち　2

アーティストが描いた絵本たち　4

索引　２０

掲載した資料はさいたま市図書館所蔵のものです。
資料が貸出中または最寄りの図書館に所蔵がない場合は、予約・取り寄せができます。図書館の職員にお申し出ください。

美術をあつかった絵本たち

絵本には、美術をテーマにしたものがいくつかあります。

ここでは、名画に親しむきっかけとなる絵本、

絵をかくことが主題の絵本、

色の原則がわかる絵本などを紹介します。

ウィリーの絵

アンソニー・ブラウン／作・絵　なかがわちひろ／訳　ポプラ社　2002

絵をかくことが大好きなチンパンジーのウィリーがかいたおもしろい絵。すべて名画のパロディです。ミレーの『落ち穂拾い』を模した絵では麦の穂をひろっている女の人がウィリーの筆にかかると別の動作に様変わり。『モナ・リザ』の微笑みもよくみるとなにやら意味ありげな微笑みにみえてきます。巻末にはもとになった絵の一覧も載っていますので、比較しながら細かい違いを楽しむことができます。ほかにも『ババールの美術館』(ロラン・ド・ブリュノフ／作　せなあいこ／訳　評論社、2005)があります。おなじみぞうのババールが美術館をつくるはなしですが、こちらではぞうが名画の登場人物になりかわっています。

ＡＢＣ美術館

ナディーム・ザイディ／絵　ジュリー・クラーク／作　もきかずこ／訳　フレーベル館　2006

美術に造詣の深いヤギのファン・ゴートがＡＢＣで始まる単語とその単語に関係する絵を見開きで紹介する絵本。例えば、Ｂではじまる単語はｂａｌｌｏｏｎでパウル・クレーの「赤い風船」を紹介、さらに絵の中の風船は何色？といった簡単な質問もなげかけます。中にはこのライオンはどんなきぶんだとおもいますか？といった絵を鑑賞する上での想像力を働かせる質問もあります。アルファベットをきっかけに子どもと対話しながら絵が楽しめます。

木をかこう

ブルーノ・ムナーリ／作　須賀敦子／訳　至光社　1982

イタリアの芸術家、ブルーノ・ムナーリによる木のかきかたの絵本。木は幹から遠くなるほど枝が細くなります。この規則をもとに、風が強く吹く場所に生えている木、枝が下をむいた木などをかいていきます。ほぼ黒一色でかかれた木ですが、規則にそって少しずつ変化を加えることでさまざまな木をかくことができます。教育者でもあったムナーリならではの1冊。同じムナーリの絵本に『太陽をかこう』（須賀敦子／訳　至光社、1984）があります。古代から太陽がどのようにえがかれてきたかを紹介するほか、いろいろな状態の太陽のかきかたがのっています。「たいていのこどもは、山のむこうにしずむ太陽をかくけれど、太陽はほかのばしょにもしずむよ」。

てん

ピーター・レイノルズ／作　谷川俊太郎／訳　あすなろ書房　2004

おえかきの時間がおわったのに絵が嫌いなワシテの画用紙は真っ白です。でも、先生にいわれて小さなてんをひとつ、サインを書いたら作品の完成です。もっといいてんがかける！　ワシテは夢中でてんをかきます。どんどんてんをかき続けたワシテはやがて･･･。きっかけの大切さと子どもの可能性を感じる絵本です。

絵をかく楽しさを教えてくれる絵本には『えのすきなねこさん』（にしまきかやこ／作　童心社、1986）もあります。「えなんて　なんのやくにたつのかしら」まわりのともだちにきかれたねこさんはかんがえます。えをかくってすてきなことじゃないのかな？

いろのダンス

アン・ジョナス／作　なかがわちひろ／訳　福武書店　1991

あか、あお、きいろ、3色の布をもった女の子たちのダンス。この3色の原色の布を重ねてだいだいやむらさきをつくります。原色はきれいな色ですが、全部まぜてしまうと茶色や灰色に変化します。色の原則をダンスをつかって教えてくれる絵本です。

類書に『いろいろこねこ』（アリス＆マーティン・プロベンセン／絵　マーガレット・ワイズ・ブラウン／文　木原悦子／訳　講談社、2002）があります。みどりの目のこねこのペンキ屋さんがあかやあおのペンキをまぜてみどり色のペンキをつくる色あざやかな絵本です。

こんにちは　あかぎつね！

エリック・カール／作　さのようこ／訳　偕成社　1999

色には赤、青、黄色の3原色があること、すべての色には補色（反対色）があることを初めて解明したのは哲学者ゲーテでした（前書きより）。緑の補色が赤であることを、理論ではなく具体的に視覚で理解させてくれるのがこの絵本です。

みどりのきつねをじっくりと見ているとあかいきつねがこんにちは！きいろいちょうちょは何色に変身するでしょうか？

アーティストが描いた絵本たち

絵画や彫刻、写真などで活躍しているアーティストが

少なからず子どものために

絵本を手がけています。

なかには絵本のスタンダードになっているものもあります。

ご存知のアーティストの名前がみつかったら、ぜひ

そのひとの絵本も手にとってみてください。

普段の作品とはまた違う魅力に、出会えるかもしれません。

おもな絵本には

図書館の児童担当のベテランたちによる紹介文をつけました。

また、そのアーティストの本来の仕事を知りたい方のための

本の案内も載せていますので、ぜひお役立てください。

村山知義 『しんせつなともだち』

方軼羣 / 作　君島久子 / 訳　福音館書店　１９６５

食べる物のない雪のある日。1つのかぶが、うさぎからろばへ、ろばからやぎへと、友達への思いやりの心をのせて届けられていく、ぐるぐる話の傑作。

月刊予約絵本「こどものとも」の創成期、物語や絵本をとおしてアジアの文化に親しんで欲しいと願う福音館書店の編集者松居直が集めた本の中にあったのが、中国の絵本『夢ト回来了』(1955)だった。

後に松居が、作者の方軼羣(フアン・イーチュン)に聞いた話によれば、朝鮮戦争の際に慰問団の贈ったひと籠のリンゴが、めぐりめぐって慰問団に戻ってきてしまったという実話を基に、苦しい戦争を「寒さ」「お腹がすく」という設定に、登場人物は動物に変更し、昔話のぐるぐる話の形式を取り入れた創作であるという。

君島久子の親しみやすい語り口調の訳でこの作品に出会った松居は、「幼稚園や保育園で劇にして遊ぶなら格好の作品」と思い、童画家であり、演出家・舞台美術家でもある村山に挿絵を依頼し、「こどものとも」の1965年4月号『しんせつなともだち』として、この作品は出版されることとなった。

後年1987年1月には、「こどものとも傑作集」としてハードカヴァー化され、2007年9月には水彩画の微妙な濃淡を再現した新規製版となり、「こどものとも絵本」の一冊にも加えられている。

なお、世界的に有名なフランスの「ペール・カストール」シリーズの一冊として、2003年(原典は1959年)に『ゆきのひのおくりもの』(ポール・フランソワ／さく　ゲルダ・ミューラー／え　ふしみみさを／やく　パロル舎)という絵本が翻訳出版されているが、この作品は驚くほどに、『しんせつなともだち』にそっくりな作品となっている。奥付の著者紹介を見ると、「本書は中国民話の再話」とある。そのことから、両者の絵が構図や細部にわたる描写まで似てしまっているのは、出版年が後である『しんせつなともだち』が『ゆきのひのおくりもの』の原典を模倣したのではなく、おそらく、それぞれの画家が画を描く際に参考にした原典(『夢ト回来了』)の絵を忠実に再現してしまった結果なのだということが予想できる。

現在では、外国絵本を翻訳出版する際には、原典の絵を使用するのが当たり前になっているが、翻訳出版の創成期には日本の画家が原典の絵を模倣して描くことも少なくなかったのだ。

参考文献

『絵本の森へ』松居直／著　日本エディタースクール出版部　1995

(宮原図書館　金子浩)

村山知義(むらやま・ともよし　1901～1977)　劇作家、演出家、画家、舞台芸術家。1923年前衛美術団体MAVO(マヴォ)を結成し活動。演劇運動にも足を踏み入れプロレタリア演劇の推進者となる。一方27年には日本童画家協会を結成、それまで童話の添え物として軽視されていた分野を芸術の域までに高めることに尽力した。31年共産党入党。二度の検挙の後、33年に転向して出獄し弾圧のため沈滞した新劇の再興に奔走するが、40年にも逮捕、保釈後は朝鮮に渡る。敗戦による帰国後は再び新劇界の中枢となる一方、小説『忍びの者』シリーズの執筆等、幅広いジャンルで活躍した。

グラフィックの仕事
村山知義／画
本の泉社、2001

村山の幅広い活躍をポスター、装幀、舞台装置画、挿絵・カットの仕事に限ってまとめたもの。商業的な仕事でも手堅くこなしているところに村山の多才ぶりがうかがえます。

村山知義とクルト・シュヴィッタース
マルク・ダシーほか／著
水声社、2005

2005年の「日本におけるダダ」展にあわせて編まれたもので、内容はかなり硬派。ドイツのダダイストであるシュヴィッタースと村山を論じることで、村山を世界的な文脈から語っています。ダダ研究のM.ダシーによる表題論考のほか、松浦寿夫、白川昌生、塚原史、田中純による論考をおさめ、また1920年代の村山の作品のカラー図版もあり。

秋野不矩『いっすんぼうし』

いしいももこ / ぶん　　福音館書店　１９６５

秋野不矩というと、濁流を懸命に渡る水牛の群れを描いた『渡河』など、インドを題材とした作品が浮かぶ。しかし、『いっすんぼうし』を始め、『うりひめとあまのじゃく』(1957)『うらしまたろう』(1974)の日本の民話ばかりでなく、インド・パキスタン・バングラデシュの昔話『きんいろのしか』(1972、以上福音館書店)など、絵本も多く描いている。

その中の『いっすんぼうし』を取り上げてみたい。まず、表紙で、花をつないだひもをひっぱり小鳥と遊ぶいっすんぼうしの愛らしさ、小ささが良くわかる。その背中に向けられた、5男1女の母である秋野不矩のあたたかなまなざしも感じられる。また中の頁で、わらぞうりを履いた足首とくわが、大きく描かれた足もとに、朝顔を担いだいっすんぼうしの後ろ姿が描かれている。その足だけであるが、何かおじいさんの愛情も感じてしまう。また、朝顔との比較でのいっすんぼうしの小ささも。この大胆な構図に後年の秋野不矩をも感じ取れる。後半で、いっすんぼうしが、りっぱな若者になった立ち姿に、わが子たちをモデルにしたという『裸童』『少年群像』が、ふと重なってしまった。さらに、絵だけ見ていくと一幅の絵巻ものをみるようであり、日本画家、秋野不矩の線の美しさも味わえる。

もっとも、秋野不矩は、画文集『バウルの歌』(筑摩書房、1992)の中で絵本について、このようなことを書いている。「ここ1年ばかりインドを歩きまわって子どもたちの生活を見たが、インドの子どもたちが絵本など見ている姿をめったに見かけなかった。(略)食べるものの切実な不足、(略)零細な金を得るため、おとなの卑しいずるさにならって働く子どもらも、(略)その心の底に愛らしい情をもっていることを知る。(略)オモチャや絵本など夢にも知らず、路上の石ころに牛糞に、捨てられた果実に、道端の草に花に深い愛をもってふれている彼らを見て、精神的に乏しいということはさらにないのである。(略)インドの子どもたちに別れを告げて日本に帰って来た。そして私は、自分の絵本が並んでいる本屋の店頭を思わずさけて通った。今日もインドでは強く耐えしのんで生きているであろう子どもたち。もし絵本を作るなら、あの泥だらけの子どもたちの遊んでいる小石や牛の糞に勝るものでなければ意味がない。」と(「牛の糞か絵本か」より)。

今年は秋野不矩生誕100年で浜松市天竜区の秋野不矩美術館ではその記念の展覧会もひらかれているようである。『いっすんぼうし』などの絵本の原画も所蔵しているので、合わせて見るのも、一興ではと思うが、いかがだろうか。

(七里図書館　塩貝政代)

秋野不矩(あきの・ふく　1908～2001)　日本画家。現在の浜松市にうまれる。1936年新文展鑑査展入選、選奨受賞。38年新文展特選受賞。74年には「創画会」結成に参加するなど活躍。61年、インドのビシュババーラティ大学(現在のタゴール国際大学)に招かれ客員教授として1年間滞在、以後頻繁にインドを訪れるようになり、インドを描いた作品が多くある。98年には藤森照信建築により秋野不矩美術館が開館、不矩没後もその作品の展示・紹介につとめている。

画文集バウルの歌
秋野不矩／著
筑摩書房、1992

不矩によるエッセイとスケッチをまとめたもの。特にスケッチは、スケッチ帖がそのままカラーで掲載されており、不矩のスケッチの魅力を伝えてくれます。エッセイもインドを舞台にしたものが多いですが、幼少の頃の思い出や絵をはじめた頃をつづったものなど、不矩そのひとを感じることができます。

秋野不矩　インド
秋野不矩／著
京都書院、1992

インドが舞台の作品集。透明感のある不矩らしい色彩が美しい画集です。序文は司馬遼太郎で、生の原稿がカラーで掲載されていて色鉛筆を使った推敲のあとも美しく、この画集にふさわしいものになっています。

脇田和『おだんごぱん』

瀬田貞二 / 訳　福音館書店　１９６６

たとえば白雪姫だ。鏡がいう「世界で一番美しいお姫さま…」を画家がリアルに描こうとすればするほど世界一が足かせになるだろう。昔話を絵本にすることはこうした難しさがある。一方で文章だけではその場面を十分に思い描けない部分を画家が絵の力で補い、絵本としての効果を上げている作品もある。

脇田和が描く『おだんごぱん』は後者の例といえる。

ストーリーはシンプルだ。やきたてのパンがおじいさんとおばあさんの家から転がりだし、自分を食べようとするうさぎ、おおかみ、くま…からつぎつぎ逃げていく。けれどもきつねには上手にだまされて最後は食べられてしまう。

一見古めかしい絵柄に見える。茶系の暖色が中心の色調はいかにも地味で、書店や図書館の棚では埋没しそうなつくりである。しかしこの絵本は出版されて４０年を過ぎ、１００回近く増刷されている実績があるのだ。

『おだんごぱん』はリズミカルなテキストを耳でききながら、目を画面に集中させたほうが楽しめる。でも、一人でみるなら、見開き単位に本を開き、テキストをゆっくり読んで、それから今度は時間をかけて丁寧に絵を追ってみるといいだろう。

主役のおだんごぱんは単純な目鼻が描かれているが、場面ごとにまったく異なる味わいのある表情になっており、けっしてかわいらしいキャラクターではない。だからこそ読者は過剰な感情移入することなく、昔話らしいあっけない幕切れも納得できる。ほかの動物たちも服を着て擬人化されてはいるが、特別の性格付けはされずにそれぞれが動物としての固有の属性を保っている。デッサン力のある画家が、あえて押さえの利いた表現をすることによって無理なく昔話の世界へと誘い込んでいるのだ。

レイアウトにも工夫が見られる。左から右へ、上から下へと物語の流れに沿った絵とテキストの配置。基本的には余白を生かして絵を際立たせる手法をとりながら、ポイントの場面では丸ごと背景を塗りつぶすなど、この点は世界の絵本に精通している訳者の瀬田貞二が果たした役割が大きいといえるだろう。

ところで、画家の描く人物は本人に似るとよく言われるが、この物語のおじいさんは晩年の脇田和そっくりなのもなかなか興味深い。

（中央図書館　中村剛）

脇田和（わきた・かず　1908～2005）　洋画家。東京の青山生まれ。１９２３年姉夫妻の渡独に同行してベルリンへ行く。ベルリン国立美術学校に5年間在学、人体デッサン・遠近画法・解剖学を専攻する。３１年、トアール会に参加し日本で初めて作品を発表する。３６年、猪熊弦一郎、佐藤敬ら8人の仲間とともに新制作派協会を結成するが、４５年の戦災で久ヶ原のアトリエを焼失、戦前の作品の多くを失う。５６年「あらそい」で毎日美術賞、グッゲンハイム国内賞を受賞。鳥がモチーフの作品を多数発表し、「鳥の画家」とよばれる。９８年文化功労者に選ばれる。２００５年、９７歳で永眠。今年、軽井沢の脇田美術館では生誕１００年展が開催されている。

脇田和作品集

１　画集、　２　資料

脇田和／著
美術出版社、１９８４

１９２７年から１９８２年までの代表的な作品が網羅されている画集と作品カタログや年譜、寄稿で構成された資料の２冊からなる作品集。「資料」には佐藤忠良が「脇田さんの仕事と人柄」なる文章を寄せています。

脇田和素描集

脇田和／著
朝日新聞社、１９８２

デッサンは、絵の生命を維持するためのものである。と語る脇田の素描９０点がおさめられています。先生に「こんな小さな手でブラッシュが持てるか」といわれ、油絵のクラスには入れず木炭ばかりの５年間だったというベルリン時代の素描も４点あり。

佐藤忠良『おおきなかぶ』

A・トルストイ / 再話 内田莉莎子 / 訳　福音館書店　１９６２

大きなかぶをみんなで力を合わせて抜くという単純な物語の中に、大らかさ、力強さ、ユーモアなどが満ちあふれ、ロシア民話の楽しさを味わわせてくれる名作。

佐藤忠良は日本を代表する彫刻家である。しかし、彫刻家としての彼を知らない人はあっても、『おおきなかぶ』という絵本を目にしたことがない人はあまりいないだろう。「おおきなかぶ」と聞けば、おじいさんが大きなかぶを担いでいる、あの印象的な表紙が目に浮かぶ人が多いはずだ。

また、「おおきなかぶ」は、再話者や画家が違っていることはあっても、様々な出版社より発売されている小学校一年生の教科書に必ず乗っている作品でもあったりする。読み言葉を覚えるテキストとして最適な「うんとこしょ、どっこいしょ」という、あのリズミカルで響きの良い文章を、誰もが一度は幼少時に体験をしているのだ。日本の子どもで、この作品を知らない子はまずいないのである。

月刊予約絵本「こどものとも」の1962年5月号として出版されたこの本は、1966年に「こどものとも傑作集」としてハードカヴァー化され、以来133刷を重ねるロングセラー作品となっていて、累計200万部を越える日本でも有数の有名な絵本といえる。

また、2007年4月の130刷より、シリーズ名が「こどものとも絵本」に変更され、新規製版になったことで、水彩画の微妙な濃淡を再現した、より美しい本に生まれ変わっているので、興味のある方は、「こどものとも傑作集」と「こどものとも絵本」を、是非見比べてみて欲しい。抜群に優れた画の力を再認識できるはずだ。

『おおきなかぶ』の編集をした松居直は、『絵本とは何か』という著作の中で、昔話絵本の挿絵について、「全体のふんいきにしろ、その民族のもっているものを正確にださなければいけない」(p.260)として、国籍不明の挿絵の多い、日本における外国昔話絵本の出版状況を嘆いている。

そして「おおきなかぶ」は、人物が描ける人が画を描かないと成立しない絵本であるとして、そのデッサン力と表現のきびしさ、シベリア抑留の厳しい労働の間、紙も鉛筆もない状況のなかで、ロシア人を目だけでデッサンしていた経験から、ロシアの風物のデッサンも豊富にしている彫刻家の佐藤忠良に、あえて挿画の仕事の依頼をしたことも明かした。

また『絵本を読む』という著作では、『おおきなかぶ』が成功した要因を、「余り昔話を意識してはいない。ロシアの農民や風土をかりて、つきつめれば彫刻家らしく、人体のムーブメントや形を、意のままに描いている」とし、「絵本としての強い形象性を獲得し、物語にリアリティーを与えている」(p.27)としている。

彫刻家が彫刻の手法を取りながら、表情豊かに、細部に至るまで手抜きすることなく描いた一級品の画には、一流の彫刻家ならではの視点が生かされているのだ。

佐藤の絵本の仕事は他にも数多くあるのだが、その中でも『おおきなかぶ』と並んであげておくべき、有名な作品として、『ゆきむすめ』というロシアの昔話絵本がある。これは、『おおきなかぶ』と同じく「こどものとも」の一冊として描かれた作品だが、選書の厳しい団体では、両作の登場人物がまったく同じに

佐藤忠良（さとう・ちゅうりょう　1912〜）　彫刻家。宮城県黒川郡生まれ。少年時代を北海道で過ごし、絵画を学ぶために上京するが、ロダン、マイヨール、デスピオなど新しい生命主義の作品に感銘を覚え彫刻家を志す。東京美術学校（現東京藝術大学）を卒業後、新制作派協会（現在の新制作協会）を舞台に活躍。44年に兵役に招集、終戦後のシベリアでの抑留生活を経て帰還後に制作を再開。その体験から、平凡なごく普通の日常生活の中でほんの一瞬だけ垣間見る「人間の美」を追求した作品を多く手掛ける。代表作、『群馬の人』（1952）

つぶれた帽子

佐藤忠良／著
日本経済新聞社、1988

タイトルは代表作のひとつ、彫刻「帽子・夏」から。収納時に上に物を乗せたため変形してしまった帽子をモデルにかぶせてみたところ、思わぬ評判になり、「帽子シリーズ」が生まれたそうです。
絵描きを志して上京、彫刻への転身、結婚、シベリア抑留、ロダン美術館での個展開催、そして忠良記念館設立と、走り続けてきた半生を振り返る手記。

ねがいは「普通」

佐藤忠良・安野光雅／著
文化出版局、2002

ふたりの出会いのきっかけは、美術教科書の編集でした。教科書業界の規制をくぐりぬけ、子供にとって良い教科書をつくるという意図を同じくしたふたり。本書は、シベリア・バイカル湖上で、仙台と津和野のそれぞれの個人美術館で、そして東京にある佐藤忠良のアトリエで、行われた対談の記録です。安野光雅美術館の看板文字は佐藤忠良の手によるものだそうです。

見え、ステレオタイプであるとして、リストから外れていたりすることがあったりもした。しかし、この指摘は本当に的を射ているのだろうか？　そうした先入観にとらわれず、シンプルに『おおきなかぶ』の絵をじっくり眺めてみさえすれば、答えはおのずと出てくるのではないかと思う。

改めて、『おおきなかぶ』の絵を見て気づくのは、その絵の表現の豊かさだ。確かに淡々と進む話の邪魔にならないよう、表情から感情を読み取れるようなあからさまな表現は確かにしていない。しかし、かぶが抜けず、疲れ果て、背中を丸め、膝を抱えて座り込むおじいさんをいたわるように見つめるおばあさんの姿や、全身を使ってかぶを必死に抜こうとする皆の姿や仕草には、考え抜かれた臨場感がたっぷりと溢れ出ている。

松居が著作の中で下した評価は、担当編集者としてのひいき目や、自分の仕事に対する過信ではなく、至極まっとうな評価なのではないだろうか。作品を厳しく評価するのは確かに大切なことだが、多くの人に楽しまれることを意識して作られた作品を評価する上では、画一的な評価基準で、断じるだけでなく、その作家ならではの作家性を認め、良い部分を評価することも大切だ。それが、子どもに本を手渡していく大人の責任のように思うのだ。

参考文献

『絵本とは何か』松居直／著　1973
『絵本を読む』松居直／著　1983
ともに、日本エディタースクール出版部

（宮原図書館　金子浩）

佐藤忠良『木』

この絵本は彫刻家佐藤忠良のデッサンに詩人の木島始が文を書いたものです。

標題紙は太い古木の写真、裏を返すと佐藤忠良が木をデッサンしている写真でともにモノクロです。そして次からは木のデッサンにあわせて著者が木に話しかけ、その気持ちを考えるというように話がすすんでいきます。ほとんどが見開き2ページをいっぱいにつかい、大きくて逞しい木がリアルに描かれています。子ども向けの甘さが無いのは佐藤の代表的な絵本『おおきなかぶ』と同じです。力強く張った根、大きく広げた枝、ごつごつしたこぶ、読者も実際の木をいっしょに見ているような気がしてきます。やがて、黒かった木に芽が出て、はじめてデッサンに水彩の黄緑色が付いた時に読者も春の訪れを知り、暖かさ、うれしさを感じます。そして4ページ分の大きさの紙面に葉を茂らせた見上げるような大きな木。まさに「うっひゃあっ」です。

著者は子どもたちを驚かせるのが好きなようです。色彩にあふれた映像世代の子どもたちが地味で大人向きともとれるこの絵本を楽しんでくれるのだろうかと不安を感じることもあるでしょうが、子どもたちは大人が思っているほどかわいい絵本ばかりが好きではありません。色彩が有る無しにかかわらず、好きなものは好きです。この絵本に描かれた木には実物や写真よりも確かな存在が感じられます。それは最後のページを見て納得させられます。

ぜひ春に子どもたちと一緒に読みたい絵本です。

（岩槻駅東口図書館　間瀬久子）

彫刻の＜職人＞
佐藤忠良
写実の人生を語る
奥田史郎･道家暢子／編
草の根出版会、2003

宮城県立こども病院の「おおきなかぶ」レリーフ製作中のインタビュー、彫刻「群馬の人」のイメージのもとになった岩瀬久雄氏との共同生活の思い出、妻･照との出会いと息子の達郎、娘で女優のオリエについての話、思いがけずロダン美術館で高い評価を得た「母の顔」のこと…自由な語りと、多数の彫刻･絵画の写真で、忠良をより深く理解できる本です。

触ることから始めよう
佐藤忠良／著
講談社、1997

現代社会の便利さと引き換えに、最近の子どもたちの触覚は衰えてきているのではないか、と危惧する著者の、彫刻家の立場からの教育論。自身の少年時代も振り返りながら、情操教育、美術教育の大切さを説き、現代の教育の問題点を指摘しています。

丸木俊『どんぶらこっこすっこっこ』

村上ひさ子 / 文　福音館書店　１９９９

丸木俊は夫の位里と、あのあまりにも有名な『原爆の図』を描いたことで知られている。また、人間の愚かな行いを二度と繰り返させないよう、子どもたちに伝えていかなくてはとの想いから、『ひろしまのピカ』（小峰書店、1980）などの絵本も残した。

その偉業とともに、一方では世界や日本の民話を題材にした絵本も数多く描いている。創作絵本も含め、その数は実に150冊を超える。スロバキア民話『12のつきのおくりもの』（福音館書店、1971）では、夜の闇の中に赤々と燃える焚火と民族衣装の色彩の美しさを、日本の民話では松谷みよ子とのコンビで、『つつじのむすめ』（あかね書房、1981）などの美しくも切ない恋物語を叙情的に描き出した。そののびのびとした筆は、いつも生あるものの躍動感にあふれている。

その中から、晩年に描かれたこの絵本を紹介したい。この『どんぶらこっこすっこっこ』に登場する大きな切り株。それは、ある大雨の日、川を流れてきて、今では丸木美術館のそばで皆がお茶を飲む時のテーブルになっている実在の切り株だ。物語の語り手は、俊の姪の村上ひさ子。日常生活から生まれた物語らしい温もりが、この絵本にはある。民話の原点を見るようだ。だから自分もその世界に入っていくのはたやすい。

がけの上にある大きな木の根っこ、その根っこの穴に住んでいる小さなねずみは、ある日大雨で、根っこごと川に流される。根っこは生あるものとして描かれていて、ねずみはしきりと根っこに話しかける。終止描かれるのは川を流されていく二人？の姿なのだが、物語は決して単調にはならない。がけを転がり急流を流され、滝つぼに落ちるその迫力。次々現れる動物たちや、変わっていく景色、主人公の大冒険に思わず胸が躍る。そして、何といっても特筆すべきは、この絵本の画面の明るさだ。色調も、これまでの作品の炎の赤の印象から、水の青、空の青と青色の世界に変わっている。久しぶりの絵本を描き上げた俊は、この年87歳。生きもののようにうねる川は生命力に溢れ、はじける波しぶきの一粒一粒の水滴まで、どれも愛らしく描かれている。夜の空の中にあっても、あまりに明るい星のまたたき。微笑ましくも「うさぎとねずみが同じ大きさになっちゃった」と話す言葉どおりの屈託のなさ。それは見ている者を子どもに帰らせる、不思議なパワーがある。これがあの「原爆の図」を描いた同じ人の手による作品？とつい思ってしまうのだが、どちらにも共通することがある。いとおしい生命へ向ける温かいまなざしだ。改めて、丸木俊という画家の大きさを感じた。

（大宮東図書館　山田玲子）

丸木俊（まるき・とし　1912～2000）　東京で出会った日本画家の丸木位里と結婚。浦和市に疎開中、原爆投下の報を受けて広島へ入る。位里と共に連作した「原爆の図」を国内外で展覧。67年、東松山市に原爆の図丸木美術館設立。戦争や公害をテーマにした作品を多数製作した。

幽霊
原爆の図世界巡礼
丸木俊／著
朝日新聞社、1972

「原爆の図」の展覧会開催は、戦時中の日本から被害を受けた国々では批判や抵抗も強く、特に、原爆を投下したアメリカでの展覧会実現までには、長い時間がかかりました。原爆投下直後の広島を体験した衝撃から「原爆の図」を製作し、戦争の現実と直面し苦悩しながら世界行脚をした著者の手記です。各国の反響がよくわかる新聞記事も多数掲載されています。

遺言
丸木位里・俊の五十年
菅原憲義／著、丸木俊／序
青木書店、1996

広島だけでなく長崎、沖縄、南京、水俣など各地で平和を祈る活動を続けてきた丸木夫妻。県立浦和西高校で平和学習も行っています。2人の出会い、位里の母・スマや位里の妹・大道あやにまつわる話、『ひろしまのピカ』の製作、絵本画家・いわさきちひろが俊の弟子であったこと、彫刻家・佐藤忠良が位里の葬儀で弔辞を読んだことなど、多彩なエピソードで辿る、夫妻の戦後五十年の歩み。

堀文子『みち』

至光社　１９７２

大好きなのに、子どもに“おもしろい本”として紹介したり、読み聞かせに使ったりしたことのない絵本がある。『はるにれ』（姉崎一馬写真　福音館書店1979年刊）、『おやすみなさいのほん』（マーガレット・ワイズ・ブラウン著　福音館書店1962年刊）、『みち』（堀文子文と絵　至光社1972年刊）などが、私にとってそういう本だった。

とくに、堀文子の『みち』は、図書館員になりたてのころ出会った、心に残る大好きな一冊だった。自分の子ども時代になかった百花繚乱の絵本群に、毎日目くるめくような体験をしているときだったにもかかわらず、私はこの本を好きな一冊として選んだ。その果てに何があるのかも知れず、それでもどこかにずっとつながっていく道。私にとって道は、その先のその先にある知らない世界の存在を信じさせてくれるものだったから、ことさら心ひかれたのかもしれない。にもかかわらず私はこの絵本を一度も子どもたちの前で紹介したことも、読み聞かせに使ったこともなかった。なぜか？

『みち』は、森や林につづく道、雪の中の道、小さな町かどの道が見開きごとに1枚ずつ描かれ、それにあわせた短い詩がつけられている。それが、とても美しい。しかし、“絵本”というのは難しいものだ。ページを繰るたびに前のページから連なるものがあり、最後のページで一つの世界が完結するのが絵本ではないか。美しい絵が数葉綴じられているだけでは絵本とはいえまい。『みち』はどちらかというと後者に近いと私は判断した。

堀文子には一般向けの『堀文子画文集　径　みち』（日本交通公社、1987）という作品がある。熊野路や富士など各地の心に残る道を、やはり美しい日本画と文章で表現したものである。『みち』は絵本というより、この画文集に近いように思えるのだ。

“絵本”としては不足があると評価した私は、『みち』を誰にも勧めることができなかった。読み聞かせといえば、どの子にも喜ばれる絵本を選んでいた。しかし千人に一人かもしれないが、この本に心をとめる子どももいたかもしれない。図書館員の仕事は人と本を結びつけること。私は、子どもに関心を示してもらえないことを恐れ、意外な本との出会いを促す努力を怠ったのかもしれない。出版から三十五年以上たった今、あらためて『みち』に光をあててみたいという思いから、ここに紹介させていただくことにした。

（北浦和図書館　並木せつ子）

堀文子（ほり・ふみこ　1918～）　日本画家。東京うまれ。1936年女子美術専門学校（現在の女子美術大学）に入学。在学中の39年に新美術人協会展に入選。52年には上村松園賞を受賞している。児童向けの出版物にも多くの作品を描いている。

画集堀文子
堀文子／著
日本経済新聞社、1993

1941年から92年までの作品を集めた大部の画集。山本夏彦ほかの小文も収録されています。

ホルトの木の下で
堀文子／著
幻戯書房、2007

堀文子による自伝。幼少期から1964年の大磯移住までをつづっています。家族や出会った人々との交流を丁寧に描きながら、幼いころの関東大震災、自宅の庭を軍隊が通っていった二・二六事件など、実際に体験した当時の出来事が印象深く描かれています。

元永定正『もこ もこもこ』

谷川俊太郎 / 作　文研出版　１９７７

「しーん もこ もこもこ にょき もこもこもこ にょきにょき･･･」これは絵本『もこ もこもこ』本文の一部分である。感覚的な言葉の羅列。何を意味しているのか想像がつくだろうか。もし大人が、書店や図書館でたまたまこの絵本を手に取ったとして、文も感覚的なら絵も抽象的で、十中八九「へんな絵本」の一言で、再び棚に戻されてしまうだろう。実はこう見えてこの絵本、1977年の出版以来、69刷を重ねるロングセラー本である。30年以上たった今でも、子どもたちだけでなく、保護者や保育士、学校の先生を虜にしている人気絵本の一つなのだ。しかし出版された当時は、日本の絵本界では異端者的存在だったのではなかろうか。今でこそ、子ども自身が評価した絵本が大人の評価とは別に、表舞台で脚光を浴びることも珍しくないが、この本が出版された頃は、まだ子どもの本は大人が品定めし、大人のものさしで評価が決まる傾向が強かったからだ。大人がこの絵本の面白さに気づくのには、少し時間が必要だった。ただインパクトが強く、気になる存在であったことは間違いない。やがて図書館のおはなし会や保育園･幼稚園などの現場でこの絵本を読み聞かせしていくうちに、予想以上に子どもたちが興味を示し喜ぶ姿を見て、この絵本の魅力に気づくようになっていったのだ。つまり、子どもの評価がこの絵本の人気を不動のものにしたといえる。

ところで、この絵本について以前から気になっていることがいくつかある。一つ目は、一般的に絵本には表紙を開くと扉と呼ばれるページがあるが、この絵本にはそれがない。いきなり本文が始まるのだ。これは従来の絵本のつくりに対する一つのチャレンジだったのだろうか。二つ目は、そもそもこの絵本は、文が先だったのか絵が先だったのかということである。思い切って出版社に問い合わせてみた。そこで初めて先に絵があって、後から谷川俊太郎氏が文をつけたのだということを知った。「もこ もこもこ」のような擬態語の組み合わせは無数にある。たとえばタイトル一つとっても、全く別のものになっていた可能性は大きい。この抽象的な絵と感覚的な言葉の出会いによって誕生した『もこ もこもこ』はまさに奇跡である。

実際に『もこ もこもこ』を子どもたちの前で読んでみることで、その素晴らしさを実感することができた。以前0～2歳児を対象とした「あかちゃんおはなし会」で読んでみたことがあったが、まだほとんど言葉を理解していない子どもたちはじーっと私の顔を見つめていた。特に0歳児の場合、読み聞かせをした時に絵本ではなく読み手の顔を見るというのはよくあることだが、その時発見したのは、この絵本には読み手の顔の表情を生き生きと見せる効果があるということだった。本文は擬態語で成り立っているので一語ずつ強調して読むことになるが、たとえば「もこ」の語尾の母音「O」を発音した時は、大きく目を見開いた表情に、「にょき」の語尾の母音「I」を発音した時は口元が笑った状態になる。その結果、聞き手の言葉を理解する力が十分でなくても、読み手の表情が豊かになることでコミュニケーションをとることができたのである。

絵本は自分で手にとってその位置から眺めた時と、少し離れて第三者に読んでもらった時とではかなり印象が違ってみえるものだが、実はかねてから「絵本は、第三者に読んでもらってはじめてその魅力を発揮するものなのでなないか」という思いが漠然とあった。しかし『もこ もこもこ』を何度も読み聞かせしているうちにこの思いが確かなものに変わった。読み手と聞き手が共感し、最後のページを閉じた瞬間に言葉には表現できない満足感を与えてくれる絵本の素晴らしさ･･･『もこ もこもこ』は十分にそれを満たしてくれているではないか。かつて異端者のように見えた『もこ もこもこ』は、実は日本の絵本界を代表する先駆者だったのだ。『もこ もこもこ』バンザイ！

（東浦和図書館　矢野悦子）

元永定正（もとながｊ･さだまさ　1922～）　画家。三重県出身。1955年、吉原治良を中心として活動していた前衛美術グループ「具体美術協会」に参加。不定形な抽象絵画で知られる。谷川俊太郎をはじめとする作家や、夫人である画家･中辻悦子との合作など、絵本作家としても有名。

「具体」ってなんだ？
結成50周年の前衛美術グループ18年の記録
平井章一／編著
美術出版社、2004

「元永定正点描」という小文において、「一時彼の属していたグループの＜具体＞という名は、誰よりも元永さんにふさわしいように私には思える」（『ことばを中心に』草思社、1985）と谷川俊太郎が述べているほど元永定正と関係の深かった「具体美術協会」。54年の発足以来の活動の記録集。元永定正の活躍はここにおさめられた写真からもうかがうことができます。

細江英公『たかちゃんとぼく』

ベティ・ジーン・リフトン / ぶん　いしづちひろ / ほんやく　小学館　１９９７

う～ん、モノクロームの写真っていいね。

舞台となる神奈川県・二宮の海岸や東京の町並み、ワカメちゃんを彷彿させる主人公たかちゃんの佇まい。半世紀ほど前の写真は、古臭さよりも懐かしさを感じさせる。

1960年。当時日本で暮らしていたアメリカ人の童話作家ベティ・ジーン・リフトンが、自分が飼っていた犬（ワイマラナー種の狩猟犬で名前はランシブル）を使って写真入りの物語を作りたいと、27歳の新進気鋭の写真家、細江英公にコラボレーションを持ちかけ、できあがった絵本。アメリカでは1967年に『Taka-chan and I』の題名で出版されたが、日本訳が出たのはそれから30年後。おかげでタイムスリップ効果も加味されたか。

マサチューセッツ州ケープコッドの砂浜で穴を掘っていて日本に行き着いてしまった「ぼく」ことランシブルは、魔法のお屋敷にとらわれの身となっている「たかちゃん」を解放するために、「日本でいちばん忠義にあつき者」を探しまわる…という筋立てのもと、エイコーが撮った写真を見て、ベティが物語りのディテールを固めるという形で作られた。

アメリカ人による異国・日本を舞台にしたストーリーは、「?」を感じる部分もあるのだが、写真は舌を巻くうまさ。このフィクションに登場するモデルは全て素人ばかりだが、少女が、犬が、白鳥が、鹿が、とても自然な表情で撮られつつ、それでいて物語を感じさせる写真は感動モノ。ところで、アメリカの子どもたちは、この絵本を読んでどんな感想をもったのだろうか。ちょっと気になるところ。

併せて読んでいただきたい、子どもを題材にした写真集をいくつかご紹介しておこう。

『おかあさんのばか』

細江英公／写真　古田幸／モデルと詩　窓社　2004

こちらはノンフィクションもの。母を亡くした少女の詩に、彼女と家族を撮った写真で構成された写真詩集で、『たかちゃんとぼく』の4年後の作品。直球ど真中という感じ。

『さっちん』荒木経惟／写真　新潮社　1994

細江英公とは対照的な作風。アラーキーといえばエロスのイメージが一般的かも知れないが、デビュー作は東京の下町の子どもを被写体にしたこの作品。はじけてます。

『男子』梅佳代／写真　リトルモア　2007

この人も細江英公的ではない作風。美しさとか感動とかに価値観を置いていない写真（カラーだし）。男の子ってバカだよな～、とニッコリして幸せ気分になれます。

（中央図書館　小笠原清春）

細江英公（ほそえ・えいこう　1933～）　戦後日本を代表する写真家の一人。米沢市に生まれ東京に育つ。1956年「東京のアメリカ娘」で初個展。59年奈良原一高や川田喜久治、東松照明らとともに「VIVO」結成。『おとこと女』（61）や作家の三島由紀夫を撮った『薔薇刑』（63、日本写真批評家協会作家賞）、舞踏家土方巽を撮った『鎌鼬』（69、芸術選奨文部大臣賞）など、多くの代表作がある。

球体写真二元論
細江英公／著
窓社、2006

17歳のときに撮った「ポーディちゃん」以降の代表作を抄録、それぞれに細江自身のコメントがついています。数多い細江の仕事をまとめてみることが出来る一冊。

決定版三島由紀夫全集　39　対談1
三島由紀夫／著
新潮社、2004

『薔薇刑』で被写体となった三島由紀夫。その『薔薇刑』についての細江との対談を収録。三島にはほかにも「細江英公序説」（全集32）など細江に関する文章がありますが、三島が「細江さんの写真にはぼくの存在感が出てるんだな」といえば「写真を撮った立場からいえば、そういうむずかしいことを一切考えて撮っちゃいないんですよ」と返すなど、やりとりの面白さは対談ならでは。

タイガー立石『とらのゆめ』

福音館書店　１９８４

ぐうぐう。とらきちは夢の世界を歩いていきます。さかさま池で遊び、池で濡れた体をお日さまで乾かすと、丸まった体はだるまさんに変身。だるまさんがひもを掴んでくるくる振り回すと、縞模様のとらきちがまた現れます。はてなし迷路に入ると、今度はたくさんの虎が出てきて…。ふしぎな光でみたされたエンドレスな夢の世界。

こどものとも1984年11月号として発売されたこの本は、1999年1月、こどものとも傑作集としてハードカヴァー化。

まず、注目して欲しいのが、とらきちの誕生シーンを描いた表紙です。これから広がる広大で奇妙な夢の世界に入っていく心の準備のためにも、まずはじっくり眺めておきましょう！　そうしておけば、この絵本が、一筋縄ではいかない、変わった夢の世界を描いた本であることも分かるはずです。

表紙のとらは、なんと宙に浮いています。そして、後ろの木のように見えるのは、逆さになった2匹のとら！　主人公のとらきちは、実はそこから現れ出た存在なのです。ちなみに、作者が言うのには、とらがみどり色なのは、動物と植物をかさねあわせたイメージとのこと。普通のとらの夢だったら、思わずがぶりと食いつきたくなりそうなおいしそうな動物がいっぱい出てきそうなものなのに、とらきちの夢には、とら以外の動物が一切出てこないのも納得ですね。

絵本を開きタイトルページを見ると、とらきちは「ぐうぐうぐう」と、宙に浮いた箱の中で眠っています。次のページはもう夢の世界。浮かんだ箱がとらの姿となり、夢の世界で目を覚ます事で、とらきちの冒険は始まるのです。

地平線まで見える、広大な荒野を宙に浮きながら、ただただ静かに歩いていくとらきち。

たどり着いた池で遊びはじめるのですが、しかしよく見ると、水面に映った、池を覗き込むとらきちの姿は、なぜか反対向きになっています。

次に濡れたとらきちを待っているのは、まるでスイカのような模様のリンゴに乗った、三つの太陽。さらに次のページで、スイカのような不思議なリンゴは、とらが丸まったものなのだということが分かったと思うと、とらきちは、とら模様のだるまに変身してしまいます。そしてだるまが紐を回すと、とらきちがまた出現するのです。

支離滅裂のようでいて、それでもお話が繋がっていってしまう、そうした不条理を何の疑問もなく受けいれてしまえるのが夢のおもしろいところですが、この展開は、まさに夢そのものといえるのではないでしょうか?

この後も、「ぐうぐうぐう」という、とらきちのリズムのよい寝息のテンポにのって、鮮やかで奇抜な、ダリの描く画を思わせる、無機質で摩訶不思議な空間が次々と登場します。有名なエッシャーのだまし絵のような迷宮も登場したりするのです。

ちなみに、とらきちは、基本的には、ずっと宙に浮いているのですが、池のところと、だるまに変身したときだけ、ちゃんと脚が地面に付いていたりします。みなさんもじっくり眺めてみれば、きっと色々な発見があるはずですよ！

（宮原図書館　金子浩）

タイガー立石（たいがー・たていし　1941～98）　本名、立石紘一。絵画、漫画や絵本、彫刻、デザイン等、マルチに活躍。進学のため上京したのを期に活動をはじめる。1968年にタイガー立石に改名、漫画家として活躍。赤塚不二夫の有名なキャラクター、ニャロメは立石の作品や口癖から着想したもの。漫画家として認められるが、突如イタリアへ移住、13年間ヨーロッパですごす。82年の帰国後、ペンネームを立石大河亞（たていし・たいがあ）に改名。晩年は、使われなくなった農家を自宅兼アトリエに自分で改装し多彩な作品を生み出した。98年春、肺がんのため、56歳の生涯を閉じた。

虎の巻
タイガー立石／著
思索社、1983

タイガー立石のマンガ作品集。ユーモラスなタッチのマンガ作品の合間にある、タイトルの無いリアルなタッチのイラスト作品も魅力です。木の枝と切り株をよくよく見ると浮かびあがるトラのシルエット、自身の尾でできた輪をくぐるトラ、などなど、現実にはありえないちょっと不思議なトラたちが登場します。

黒い太陽と赤いカニ
岡本太郎の日本
椹木野衣／著
中央公論新社、2003

美術批評家の椹木野衣による岡本太郎論で、このなかのひとつの章（「岡本太郎とタイガー立石」）でタイガー立石が大きく取り上げられています。漫画家として一世を風靡した岡本一平を父に持ち、前衛的美術作品を生み出した岡本太郎。赤塚不二夫と交流が深く、漫画界でも活躍していた立石。ナンセンスギャグ漫画と前衛芸術との境界線上にいたふたりの芸術家についての考察です。

山本容子『犬のルーカス』

ほるぷ出版　１９９４

「子どもにも大人にも開かれた、新しい絵本ワールド」をコンセプトとするシリーズの1冊。著者の持ち味である西洋風のお洒落なタッチで、大きい活字で振り仮名もあるとはいえ、子どもより大人が読むための本という感じがします。

以前から著者をＴＶや写真で見て、まるで女優のように、華やかな笑顔が魅力的なひとだなあと思っていました。その魅力はやはり周囲を惹き付けるようで、自伝『マイ・ストーリー』（新潮社、2004）を読むと、非常に恋多き女性という一面がうかがえます（余談ですがこの『犬のルーカス』にも頻出する“パートナー氏”は著者と14年間を共に生きた著名な美術評論家ですが、奥さんがいる人でした。そういう面でも、この絵本はやはり大人向といえるのでは）。

そんな恋多き彼女が人生で一番愛した相手、それはこの絵本の主人公、ルーカス・クラナッハではないでしょうか。ルーカスは、海辺で出会った迷い犬。著者と“パートナー氏”はミルクを飲ませ、尊敬する大画家の名前をつけ、一緒に暮らしはじめました。食事も一緒にとり、食卓につくための専用の椅子までプレゼントする、旅行にはつれていけないけれど旅行中に必ずルーカスへのお土産を選ぶ時間を設けるなど、飼い犬というより家族の一員として尊重しています。この本に描かれた、たくさんのルーカスの表情はとても雄弁で、著者とルーカスが会話をし、心を通じ合わせていたことがよくわかります。著者にとって、単なる愛犬以上のたいせつな存在であったことが伝わってくる絵本です。

ざんねんながら2003年に天国へ旅立ってしまったルーカスですが、現在は、著者のオフィシャルサイト(山本容子美術館 LUCAS MUSEUM　http://www.lucasmuseum.net/）のシンボルにもなって生き続けています。

（与野図書館　長田順子）

山本容子（やまもと・ようこ　1952～）　埼玉県浦和市で生まれ、大阪で育つ。京都市立芸術大学美術学部西洋画専攻科修了。銅版画家として日本現代版画大賞展西武賞ほか多数の受賞歴をもつほか、『クリスマスの思い出』（トルーマン・カポーティ著　村上春樹訳　文藝春秋）、『TUGUMI』（吉本ばなな著　中央公論社）など装幀・挿画、アクセサリーや食器のデザイン、TVCM出演など多方面で活躍。パブリック・アートも多く手がけ、07年10月にオープンした鉄道博物館の2階には幅約10メートルのステンドグラス作品『過ぎゆくもの』が飾られている。

犬は神様
DOG is GOD
山本容子／著
講談社、2006

版画のように文字を反転させるとＤＯＧはＧＯＤ、そう、犬は神様…。飼い犬を見ると芸術家の考え方や生き方が浮かび上がると考える著者が、自身の最愛の犬ルーカスほか、今まで出会った犬たちと共に過ごした人生を振り返るエッセイです。

ルーカス・クラナッハの飼い主のメキシコ旅行
山本容子／著
徳間書店、1992

愛犬ルーカスに留守番させて、パートナー氏と出かけた旅行記の第2弾。あとがきはルーカスが書いています。随所の挿絵はもちろん、26ページにわたる画集風の目次もお洒落です。

大竹伸朗『んぐまーま』

谷川俊太郎 / 文　クレヨンハウス　２００３

「うーむ…」4人の児童図書館員が、大竹伸朗の『んぐまーま』を前にうなってしまった。2003年の選書会議でのことである。かつて、図書館では、受け入れた児童書すべてを手分けして読み、内容や印象をデータベースに入力し、選書会議で議論を戦わせていた（現在は、もっと平易な形で行っている）。会議では、『んぐまーま』は評価不能で、実際に読み聞かせをして反応があったらデータベースに記入しようということになった。ところが、誰もおはなし会で演じることがなかったので、データベースはそのままで、すっかり記憶のかなたに追いやられてしまった。それから5年が経過し、今日に至るのだが、『んぐまーま』を改めて手にして、やはり途方に暮れてしまった。パワーは感じられるのだが、どうしてもこの絵本の魅力を言葉で表現できないのである。

絵本を眺めていても、何も進展しないので、子どもたちに読み聞かせをして反応を確かめることにした。一番正直なのは、子どもだと思ったからだ。そこで、0～1歳半くらいの子どもたちに読んでみると、じーっと絵本を眺めている。興味をそそられる何かがあるようだ。お母さんたちも、じーっと眺めていたが、次に何が起こるのか注視しているような見つめ方だ。結局、お母さんたちはわからずじまいで、戸惑っているのは明らかだった。

図書館員も親子も混乱している。それなら、視点を変えてどれくらい利用されているのか調べてみることにした。『んぐまーま』の貸出回数をコンピュータで抽出してみると、変わった本の割にはたくさん貸し出されていたのである。たとえば馬宮図書館では2003年から2008年までの約5年間、41回も貸し出されているし、埼玉県内でもダントツの貸出冊数を誇る東浦和図書館が所蔵している2冊の『んぐまーま』はそれぞれ、26回、16回も貸し出されている。幼児向けの絵本にしては良好な数字だ。この貸出回数はなぜなのだろう？　作者の谷川俊太郎という名前で貸し出されているのだろうか。絵に詳しい同僚は「大竹伸朗は色使いがうまく遠近の出し方が上手」というのだが、私には絵の素養がないので、大竹伸朗の良さが全くわからない。

あまりにも意味がよくわからないので、気を取り直して、もう1冊の大竹伸朗の『ジャリおじさん』（福音館書店、1993）を読んでみることにした。鼻の頭にヒゲのあるジャリおじさん（ヒゲというより鼻毛にみえる）の冒険物語？だ。「ジャリジャリ」という意味不明のあいさつとジャリおじさんという謎のキャラクターがユーモラスに感じられたが、ただそれだけだった。ナンセンス絵本と一言で片付けてしまえば簡単だし、実際ナンセンス絵本なのだろうが、長新太のナンセンス絵本とは異なり、読み聞かせをするにも遠目が利かないので、おはなし会向きではない。おそらく、おすすめ本のブックリストに載せることはないだろう。

魅力はあるが、評価不能。一児童図書館員としての率直な感想である。

（東浦和図書館　古川耕司）

大竹伸朗（おおたけ・しんろう　1955～）　画家。東京出身。1982年の個展以来活発な創作活動を展開。2006年の大規模な回顧展は注目をあつめた。ほかノイズバンドのメンバーとして音楽活動もおこなっている。現在愛媛県宇和島在住。

東京サンショーウオ
アメリカ夢日記1989
大竹伸朗／著、V.オリヴァー／編
Kyoto Shoin、１９９３

1989年、大竹伸朗はアメリカを旅行しました。そのあいだにつくられた作品を、日記風の文章とともに、デザイナーであるヴォーン・オリヴァーが構成したもの。様々なイメージがコラージュされた大竹の作品が、色鮮やかにまとめられています。

なんにもないところから芸術がはじまる
椹木野衣／著
新潮社、２００７

「私がいいたいのは、この展覧会を境に、従来の大竹伸朗への評価－つまり、衝動やジャンクに偏って語られてきた－は、やはり軌道修正される必要がある、ということなのだ。その意味で「全景」展はやはり驚きであり、大きなショックであった。」（p.208）　美術批評家椹木野衣の評論集で、06年の大回顧展「全景」展にあわせて書かれた論考2編が含まれています。

MAYA MAXX『しろねこしろちゃん』

まっ黒なお母さん猫から、子猫が生まれました。真っ黒な子猫が3匹と、真っ白な子猫が1匹。みんなお母さんのお乳を飲んで、どんどん大きくなりましたが、しろちゃんは、みんなとおなじ真っ黒になりたくてたまりません。揺れ動く子どもの気持ちを描いた作品。

森佐智子が大学生のとき、1954年に雑誌「母の友」に掲載した、「こどもにきかせる一日一話」のなかの一つを絵本とした作品。こどものとも年少版の2002年4月号として出版され、その後、2005年3月に福音館の幼児絵本としてハードカヴァー化されている。

本人もインタビューなどで語っているように、MAYA　MAXXの絵は、一見するとまるで子どもが適当に書いたような気軽な絵に見える。ポップで現代的である一方、「ライブペインティング」で描かれる黒一色で描かれたサルの絵のように、荒々しいまでの力に満ちている作品もあるのが、MAYA　MAXXのおもしろいところだ。「MAYA　MAXXの絵はかわいいけどせつない」という若者の感想に「本質を捉えている」と感心し、「欠けてる部分があるからこそ、何かが生まれてくる。絵にせつない感じがあるうちは大丈夫だな」と自己分析する姿には、悩んだすえに行き着いたスタイルに対する自負も伺える。

では、この作品の絵はどうだろうか？　一見すると、ポップで可愛らしい印象の絵。力強い黒が第一印象として伝わってはくるが、余白を充分に生かし、色数を極端に抑えることで、スッキリとした落ち着いたトーンに仕上っている。深みのある魅力的な黒の魅力を存分に活かしていることは、主人公が黒という色に対してあこがれ、疎外感を感じる作品内容にもマッチしている。ねこの家族が住んでいるのが土管であること等、文章が書かれた、のどかで過ごしやすい時代に思わせる工夫がされている点も好ましい。

可愛らしい絵を描くこともあるが、彼女の真の魅力は、この作品に見られるような、力強い黒の使い方にある。この作品は、可愛らしさと力強さが見事に融合した、見事な作品であるといえるだろう。

（宮原図書館　金子浩）

MAYA　MAXX（まや・まっくす　1961～）　画家、イラストレーター、絵本作家。早稲田大学教育学部を卒業後、独学で絵を学びはじめる。MAYA　MAXXの名を一躍有名にしたのは、観客と会話しながら描くという独自の「ライブペインティング」。1999年ラフォーレ原宿で行われた個展では1万人を動員した。

絵が「ふるえるほど好き」になる

MAYA　MAXX／監修
美術出版社、2005

100年近い歴史と50万点以上の収蔵品を誇るロシアのプーシキン美術館を訪れたMAYA　MAXX。ロシアを旅して「根本的になにかが変わった」という彼女が、そこで出会った名画たちについて、芸術が溶け込んだロシアの美しい風景について、そして絵を描くことについて語ったエッセイ集です。

マヤマックスの どこでもキャンバス

MAYA MAXX+ポンキッキーズ／作
角川書店、2000

白い壁、板塀、コンクリート塀、白いベンツ…。さまざまな平面を大きなキャンバスに変えて、MAYA　MAXXと子ども達が自由奔放に描きまくった作品群。子ども向けTV番組の1コーナーを写真集化したものです。

詳しくご紹介できませんでしたが、

ほかにもまだ絵本を手がけたアーティストがいます。

しま

野見山暁治 / 文・絵　光村教育図書　１９９９

「カーテンをあけたらしまがみえた」という言葉ではじまりますが、「どこからきたの？」と問いかけているように、この島はただの風景ではありません。空からきたのか海からきたのか流れてきたのか、雲にかくれてしまうと気になって仕方がない、そんな存在。
画家の野見山暁治（1921～）はそんな「しま」を、野見山が本職の抽象画でみせるような、灰色を基調とした渋い色彩と画面を横切る奔流のような筆致で描きました。はたしてお子さんに親しまれるような絵本かどうか。

ことり

新宮晋 / 作　文化出版局　２００７

一羽の小鳥がつがいになり、巣をつくり、ひなを育て、そのひなが巣立つまでを描いた絵本。とはいえ、物語は文字でつづられることはありません。この絵本の特徴は、ページに挟み込まれたシートに描かれた絵が、もとの絵に重ねられることで、動きや時間の推移を感じさせる点です。
新宮晋（1937～）は彫刻家で、風や水などの影響をうけて動く彫刻をつくってきました。この絵本でも、絵をスタティックなものにとどめることなくしかけ絵本のような面白さを感じさせてくれる点に、共通する志向を見ることができます。

ハルばあちゃんの手

木下晋 / 絵　山中恒 / 文　福音館書店　２００５

うまれついて器用な手をもったハル。その手でかずらのつるから編んだかごをほしいといったのがユウキチだった･･･。手がうみだすハルの人生の物語。
木下晋（1947～）は鉛筆をもちいて写真とみまがうような細密な絵を描く画家。この絵本では、そうした写真らしさよりも、白と黒のやわらかい調子が物語の叙情性を際立たせます。

ぽぱーぺぽぴぱっぷ

おかざきけんじろう / 絵　谷川俊太郎 / 文　クレヨンハウス　２００４

人なのか動物なのか、様々なカラフルなかたちがページをかえて拡大されたり組み合わされたりしながら描かれている絵本。そのあいだを縫うように「ぽぱぷぽぴ」「ぱぷっぱ」などの文が画面のなかを自由に飛びかっています。
岡崎乾二郎（1955～）は絵画や彫刻、映像まで様々な手段を用いて活躍しています。しかし、出版されているものでは実作よりも理論的著述の仕事のほうが目立ち、絵本とはいえその作品をみることができる数少ない書籍です。

ともだちがほしかったこいぬ

奈良美智 / 絵、文　マガジンハウス　１９９９

あまりに体が大きすぎてだれも気付いてくれない子犬と、その子犬に気付いてしまった女の子のおはなし。
吉本ばななの本の表紙でおなじみ、目のつりあがった女の子の絵で有名な奈良美智（1959～）による絵本。

しっぽしっぽ　こどものとも0.1.2.

三沢厚彦 / え　くれたにゆき / ぶん　福音館書店　２００４

「しっぽしっぽ　だれのしっぽ」　いろいろなしっぽのもちぬしはとぼけた感じの動物たち。ふとい筆触で描かれた動物たちはなかなかユーモラスです。
三沢厚彦（1961～）は彫刻家で、木を素材に動物を独特な質感で表現します。その創作の様子は『ぞうをつくる』（「月刊かがくのとも」福音館書店、2006）でみることができます。また、作品集『ANIMALS+』（求龍堂、2007）では、彫刻作品をまとめてみることができるほか、「ぐりとぐら」シリーズの著者である中川李枝子氏との対談も収録。

けばけば

むらかみたかし / 絵　きたがわゆうじん / 文　カイカイキキ　２００３

様々な色を持っているけばけば。ヒヨコがいじめられていたら黄色をあげて元気にし、太陽が元気がなければ赤色をあげて天気をよくし…やがて色を全部あげてしまったけばけばはどうなってしまうのか？
村上隆(1962～)は、海外でも評価の高いアーティスト。5月のオークションでは作品が日本円で約16億円で落札されました。美術の商業的な面での活動を意識的におこなっており、『芸術起業論』（幻冬舎、2006）などの著作もあります。文はポップデュオ「ゆず」の北川悠仁。

すーびょーるーみゅー

土佐信道 / 絵　谷川俊太郎 / 文　クレヨンハウス　２００７

何かのエンブレムのようなかたちと、その横に付された文。文も意匠化されていて読みにくいことこのうえなし。絵本を読むというよりも、デザインとしてみたときに面白みを感じる絵本です。
土佐信道(1967～)は、「明和電機」の名前で様々な作品やパフォーマンスを発表するアーティスト。

これなーんだ？　こどものとも0.1.2.

ムラタ有子 / 絵　のむらさやか / 文　福音館書店　２００６

「これなーんだ？」　不思議なかたちの道具は誰かのもちもの。誰が何に使うのかな？　小さい子を対象とした絵本で、柔らかい色で描かれた絵をみながらなぞなぞを楽しめます。
ムラタ有子（1973～）は画家。動物や風景を柔らかい色彩でのっぺりと描きます。そのスタイルはこの絵本でも見ることができます。

索引

人名

あ
秋野不矩 6
姉崎一馬 11
アーメド、ジャラール 6
荒木経惟 13
安野光雅 8
石井桃子 6、11
いしづちひろ 13
内田莉莎子 8、10
梅佳代 13
大竹伸朗 16
岡崎乾二郎 18
奥田史郎 9
オリヴァー、ヴォーン 16
カポーティ、トルーマン 15
か
カール、エリック 3
木島始 9
きたがわゆうじん 19
木下晋 18
木原悦子 3
君島久子 5
クラーク、ジュリー 3
くれたにゆき 19
さ
ザイディ、ナディーム 3
佐藤忠良 8、9
さのようこ 3
椹木野衣 14、16
シャロー、ジャン 11
ジョナス、アン 3
白川昌生 5
新宮晋 18
須賀敦子 3
菅原憲義 10
瀬田貞二 7
せなあいこ 2
た
タイガー立石 14
ダシー、マルク 5
田中純 5
谷川俊太郎 3、12、16、18、19
塚原史 5
道家暢子 9
時田史郎 6
土佐信道 19
トルストイ 8
な
なかがわちひろ 2、3
奈良美智 19
にしまきかやこ 3
野見山暁治 18
のむらさやか 19
は
浜田広介 6
平井章一 12
方 軼 羣(フアン・イーチュン) 5
ふしみみさを 5
ブラウン、アンソニー 2
ブラウン、マーガレット・ワイズ 3、11
フランソワ、ポール 5
ブリュノフ、ロラン・ド 2
古田幸 13
プロベンセン、アリス 3
プロベンセン、マーティン 3
細江英公 13
堀文子 11
ま
松居直 5、8
松浦寿夫 5
松谷みよ子 10
MAYA MAXX 17
MAYA MAXX+ポンキッキーズ 17
丸木俊 10
三沢厚彦 19
三島由紀夫 13
ミューラー、ゲルダ 5
ムナーリ、ブルーノ 3
村上隆 19
村上春樹 15
村上ひさ子 10
ムラタ有子 19
村山知義 5
もきかずこ 3
元永定正 12
森佐智子 17
や
山中恒 18
山本容子 15
吉本ばなな 15
ら
リフトン、ベティ・ジーン 13
レイノルズ、ピーター 3
わ
脇田和 7

書名

あ
秋野不矩 インド 6
ANIMALS＋ 19
いっすんぼうし 6
犬のルーカス 15
犬は神様 15
いろいろこねこ 3
いろのダンス 3
ウィリーの絵 2
うらしまたろう 6
うりひめとあまのじゃく 6
ABC美術館 3
絵が「ふるえるほど好き」になる 17
えのすきなねこさん 3
絵本を読む 8
絵本とは何か 8
絵本の森へ 5
おおきなかぶ 8
おかあさんのばか 13
おだんごぱん 7
おやすみなさいのほん 11
か
画集堀文子 11
画文集バウルの歌 6
木 9
木をかこう 3
球体写真二元論 13
きんいろのしか 6
「具体」ってなんだ？ 12
グラフィックの仕事 5
クリスマスの思い出 15
黒い太陽と赤いカニ 14
芸術起業論 19
決定版三島由紀夫全集 13
けばけば 19
ことばを中心に 12
ことり 18
これなーんだ？ 19
こんにちは あかぎつね！ 3
さ
さっちん 13
触ることから始めよう 9
しっぽしっぽ 19
忍びの者 5
しま 18
ジャリおじさん 16
12のつきのおくりもの 10
しろねこしろちゃん 17
しんせつなともだち 5
すーびょーるーみゅー 19
ぞうをつくる 19
た
太陽をかこう 3
たかちゃんとぼく 13
男子 13
彫刻の＜職人＞佐藤忠良 9
TUGUMI 15
つつじのむすめ 10
つぶれた帽子 8
てん 3
東京サンショーウオ 16
ともだちがほしかったこいぬ 19
虎の巻 14
とらのゆめ 14
どんぶらこっこすっこっこ 10
なんにもないところから芸術がはじまる 16
ねがいは「普通」 8
なはババールの美術館 2
はるにれ 11
ハルばあちゃんの手 18
ひろしまのピカ 10
ぽぱーぺぽぴぱっぷ 18
堀文子画文集 径 みち 11
ホルトの木の下で 11
ま
マイ・ストーリー 15
マヤマックスのどこでもキャンバス 17
みち 11
村山知義とクルト・シュヴィッタース 5
もこもこもこ 12
や
遺言 10
幽霊 10
ゆきのひのおくりもの 5
ゆきむすめ 8
ら
ルーカス・クラナッハの飼い主のメキシコ旅行 15
わ
脇田和作品集 7
脇田和素描集 7
んぐまーま 16

★展覧会のご案内★

ぐりとぐらとなかまたち

山脇百合子絵本原画展

２００８年７月５日（土）～８月３１日（日）

うらわ美術館

開館時間　午前１０時～午後５時 / 土・日曜日のみ午後８時まで

（入場は閉館の３０分前まで）

休館日　月曜日（７月２１日の祝日は開館、翌火曜７月２２日は休館）

観覧料　一般５００円（４００円）、大高生３００円（２４０円）、中小生無料

＊（　　）内は２０名以上の団体料金

ワークショップ

７月９日（水）～８月３１日（日）

楽しく自由に工作したり、絵を描いたりできます。

自由参加（無料）　ギャラリーＤ

「ぐりとぐらとなかまたち」のおはなし会

さいたま市図書館の職員が、普段は図書館でおこなっている

「おはなし会」を美術館に「出前」します。

日時：７月２３日以降の毎水･金曜日　午後２時～２時３０分

対象：幼児・小学生　　場所：ギャラリーＤ

無料、事前申込み不要

詳しくは・・・

★図書館でのおはなし会のご案内

さいたま市図書館では定期的に幼児･児童を対象とするおはなし会を開催しています。
特に記述のない限りは無料･申し込み不要です。お気軽におこしください。
夏休み期間中は休止したり、特別プログラムを開催したりする場合もあります。
このほかにあかちゃん向けのおはなし会を開催している館もあります。
詳しくは各館にお問い合わせください。

中央図書館（871－2100）
おはなし会　毎週水曜日　午後3時30分から
対象：幼児･小学生（親子可）

北浦和図書館（832－2321）
おはなし会　毎週水曜日　午後3時30分から
対象：幼児･小学生（親子可）
えほんのじかん　毎週日曜日　午前11時から　対象：誰でも可

南浦和図書館（862－8568）
おはなし会　毎週木曜日
午後3時から　対象：幼児（第1･3週の回のみ親子可）
午後4時から　対象：小学生
おやこおはなし会　毎月第2土曜日　午前11時から
対象：幼児･小学生と大人

東浦和図書館（875－9977）
おはなし会　毎週木曜日　午後3時30分から
対象：3歳以上（親子可）
どんぐりおはなし会　毎月第2･4土曜日
午前11時30分から　対象：幼児･小学生（親子可）

桜図書館（858－9090）
おはなし会　毎週水曜日　午後3時30分から
対象：幼児･小学生（親子可）
「さくらんぼ」のおはなし会　毎月第1･3土曜日
午後2時30分から　対象：小学生･幼児（大人可）

桜図書館大久保東分館（853－7100）
おはなしの会　毎週木曜日　午後4時から
対象：幼児･小学生（親子可）

大宮図書館（643－3701）
おはなし会　毎週水曜日　午後3時30分から
対象：3歳～（親子可）

大宮西部図書館（664－4946）
おはなし会　毎週水曜日　午後3時30分から　対象：3歳～

大宮西部図書館三橋分館（625－4319）
おはなし会　毎週木曜日　午前10時30分から
対象：3歳～（3歳未満の子は保護者同伴可）

北図書館（669－6111）
おはなし会　毎週水曜日　午後4時から
対象：幼児･小学生（親子可）

宮原図書館（662－5401）
おはなし会　毎月第3土曜日　午前11時から
対象：幼児･小学生（親子可）

馬宮図書館（625－8831）
おはなしスクランブルｉｎ馬宮　毎月第３水曜日
午後３時から　対象：幼児と親
＊事前申込が必要です

春野図書館（687－8301）
おはなし会　毎月第3水曜日　午後3時30分から
対象：幼児･小学生（親子可）

大宮東図書館（688－1434）
えほんの会　毎月第2･4木曜日　午後2時30分から
対象：幼児･小学生（親子可）

七里図書館（682－3248）
おはなし会　毎月第2･4水曜日
午後3時30分から　対象：幼児（親子可）
午後4時から　対象：小学生（親子可）

片柳図書館（682－1222）
おはなし会　毎月第1･3水曜日　午後4時から
対象：幼児･小学生（親子可）

与野図書館（853－7816）
おはなしこども会　毎月第2･4水曜日　午後4時から
対象：幼児･小学生

与野図書館西分館（854－8636）
紙芝居ひろば　毎月第3土曜日　午前11時から
対象：3歳～小学生（親子可）

与野南図書館（855－3735）
えほんの会　毎月第3水曜日　午後3時から
対象：幼児･小学生（親子可）

岩槻図書館（757－2523）
ちいさなおはなし会　毎月第3木曜日
午前11時30分から　対象：幼児（親子可）

岩槻東部図書館（756－6665）
親と子のふれあいおはなし会　毎月第3木曜日
午前11時から　対象：幼児（親子可）

平成20年7月5日

編集･発行　さいたま市図書館
http://www.lib.city.saitama.jp/

さいたま市図書館のご案内

＊　資料を借りる際には図書館利用者カードが必要です。市内在住･在勤･在学の方、および相互利用協定を結んでいる市町村（上尾市、伊奈町、戸田市、蕨市、川口市、春日部市、蓮田市、川越市）に在住の方ならどなたでもカードをお作りいただけます。住所の確認できるものをご持参ください。なお、館内での利用の場合は不要です。

＊　資料の貸出はおひとり各館１０点まで、２週間です。

＊　図書館によって休館日、開館時間が異なります。ご利用の前にご確認ください。

＊　館内ＯＰＡＣ（資料検索端末）やインターネットからでも予約･取り寄せができます。ご希望の方にはパスワードを発行しておりますので、図書館窓口にお申し出ください。

平成２０年７月５日

編集･発行　さいたま市図書館

http://www.lib.city.saitama.jp/